

日本記者クラブ会報

第358号
1999年
(平成11年)
12月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100-0011
◎社団法人 日本記者クラブ
☎〇三三五〇三二七二二(代)

自民、民主の党首選で討論会

企画委員長 堀川 吉則

「わが国の経済成長率は(十二月発表の実績見込みで)プラスになっているか?」「完全失業率が5%以上になることがあるか?」

ことしの「予想アンケート」は十問のうち四問までが、右のほか



自民党総裁選討論会であいさつする堀川委員長 (9.17)

金融や為替問題など、経済分野からの出題でした。まさに「景気回復」と「雇用情勢」をはらはらしながら見守った一年でした。

このアンケートの正解発表と最高得点者の表彰式は明年一月十八日の新年互礼会で行います。結果は、そのときのお楽しみです。

五月下旬に毎日新聞の木戸さんの後任として、企画委員長を務めることになりました。恒例ですの、一年のおもな活動について報告します。

記者会見などの行事は、例年とほぼ同数の七十五件。出席者も多く高い関心を集めたのは次の二つ

でした。一つは、インドネシアのワヒド大統領(十一・十六)の会見。アチェ特別州で「七カ月後に住民投票」を言明し、注目されました。もう一つはシュレーダー首相(十一・二)の会見。十一月九日のベルリンの壁崩壊十周年とほぼ重なるタイミングでした。「中国のサミット参加提唱」が大きな見出しになりました。

九月に自民党総裁選と民主党党首選の公開討論会を実施しました。候補者同士の討論を根づかせることに重点をおき、第一部は各候補の主張およびディベート、第二部は代表質問の形式をとりました。自民党の方は、選挙期間中に初めて候補者が一堂に会して長時間の論争をする場となり、各紙とも大きな扱いでした。

公平を期して、民主党の場合も、時間、形式などをそろえました。テーマは自民は「この国をどうす

るのか」。民主は「巨大与党にどう対抗するのか」でした。いずれもNHKが生中継しました。全体にすこし間延びしたり、質問者の踏み込みがもう一つという指摘もありましたが、次回はさらに工夫したものにしたいと思います。

八月には地方紙・地方局の中堅記者を主な対象に「第二回記者研修」を行いました。ことしは米国大使館に向いてのフォーリー大使のブリーフィングが好評でした。那部専務理事が、英国大使館の会員にこの話をしたところ、ゴマソール大使が、公邸も公開するので、来年はぜひ当方での申し出があったそうです。

このほか見学会も、東電福島第一原子力発電所、千葉県三番瀬、NHK放送技術研究所訪問と三回行いました。

来年は選挙の年。いつあってもおかしくない総選挙に合わせてクラブ主催で定着した恒例の各党党首選討論会の準備もはなから目を見守りません。自分、政局から目が離せない日々が続きます。

(読売新聞社専務取締役編集室)

原初代理事長が受賞

「世界の報道人五十人」顕彰

日本記者クラブの初代理事長を務めた故原四郎氏（元読売新聞社副社長）が、過去五十年間に傑出した功績を残した「世界のジャーナリスト」として、日本人でただ一人、栄えある顕彰を受けることになりました。

国際新聞編集者協会（IPI）



クラブゲスト第1号・フォール元仏首相昼食会
右が当時の原理事長 (1970.1.13)

が、来年五十周年を迎えるにあたって選考をすすめてきた「プレス・フリーダム・ヒーロー」の五十人の一人に内定したのです。顕彰式は、来年四月に米国ボストンで開催されるIPI世界大会で行われます。

原氏は、読売新聞社社会部記者として、社会不正や事件の真相を徹底的に究明して大キャンペーンを展開、数々のスクープを放ってきた偉大なジャーナリストです。特に、一九五〇年代、世界の列強が行った核実験に対する危険性と原子力の平和利用を訴えた連載企画を手がける一方、ビキニ諸島沖の水爆実験で第五福竜丸の被爆をスクープし、核兵器の拡大に警鐘を鳴らし続けた骨太の編集者として知られます。

新聞協会編集委員会代表幹事を務めた六九年、世界各国から多くの国賓、公賓が来日する大阪万国博の開催を一年後に控え、こうした賓客が日本国民に向けて第一声を放つ場としてのナショナルな日本記者クラブの必要性を訴え、その設立に尽力し、初代理事長に推されたことは、皆さん、ご承知の通りです。日本のマスコミ界を代表して、言論の自由に貢献した原初代理事長の、「世界の報道人」顕彰を心から喜びたいと思います。

両陛下をお迎えした創立三十周年パーティーを終えた翌二日、杉田理事長に同行して宮中にお礼の記帳に伺いました。会場をご退出された際、記念出版の『三十年の歩み』と『とおきの話(四)』をおみやげに差し上げたところ、後日、宮内庁から、両陛下が大変喜ばれたとのことづけを頂きました。また、三十周年を記念して八十歳以上の会員四十六人にクラブのネクタイを贈りました。わざわざ、そのネクタイを締めてお礼に見えた会員も多く、好評でした。

法人賛助会員に東海旅客鉄道が新しく仲間入りしました。昨年十月以来、社会的評価が確立した企業で、ニュースソースたりうる法人賛助の新人会促進を進めてきましたが、これで七十二社を数えました。うれしいことにこの間、法人賛助の脱会は一社も出ておりません。

個人D会員と特別賛助会員の会費納入は、三カ月ごとの銀行自動引き落としを原則としておりますが、会費を自己負担しているA、B、C会員についても、同じように来年四月から銀行引き落としをさせていただくことになりました。請求書を持って銀行で振込手続きをする手間が省けますので、便利かと思えます。

十一月のクラブゲストは、シュレーダー独首相、ラミー欧州委員会委員、アナン国連事務総長、ワヒド・インドネシア大統領、シン・インド外相の五人。シュレーダー首相は杉田理事長、アナン事務総長は木戸副理事長が司会を務めました。

（専務理事 那部吉正）

ク ラ ブ ゲ ス ト

ゲルハルト・シュレーダー

ドイツ首相

訪日したドイツのゲルハルト・シュレーダー首相の記者会見が、十一月二日行われた。昨春秋、十六年間の首相をつとめたCDU/CSU（キリスト教民主/社会同盟）のコール首相を破って、自ら率いるSPD（社会民主党）と「同盟90/緑の党」の連立政権を組織した。首相としては初の来日である。

今年五十五歳。前任者コールからすればたしかに若返ったが、コールも五十一歳、その前のシュミットも五十五歳で首相に就任したから、シュレーダー氏がとくに若いというわけではない。むしろドイツでは初の戦後育ちの首相という点に関心をひく。

会見ではシュレーダー首相は、来年開かれる沖繩サミットに関連し、二十一世紀に向けて中国のG8参加を積極的に支持する発言を行った。この発言はやや唐突な感でうけとられたようだが、考えてみると、シュレーダー氏は、NATO軍によるユーゴの中国大使館爆撃の直後に中国を訪問、六月にはケルンでサミット



を主催している。今回の発言をその延長線上で考えれば、自然な発想ということになる。

シュレーダー氏はまた会見で、連事務総長の地位を高めて国連の権威を強化する必要を強調する一方で、日独の安保理常任理事国入りで共同歩調をとる立場を明らかにした。しかしドイツの安保理入りは、英仏との関係もあり、状況こそ異なる日本同様、実現は容易ではないようだ。ドイツ側記者団の質問が、も

っぱらこの点に集中したこともそのことをうかがわせた。

シュレーダー政権は、発足後まもなく重鎮のラフォンテーヌ蔵相の辞職で打撃をこうむった。高失業率はいつこうに下がらず、最近ドイツで行われる地方選挙でSPDの不振が目立つ。今年ベルリンに首都が移転したが、東西の生活格差は大きく、「心の壁」は依然として立ちほだかっている。政権支持率も低下傾向にある。対外的にも政権発足当初、戦後育ちの首相なるがゆえに、他のEU諸国との摩擦が伝えられた。

パスカル・ラミー 欧州委員会委員（通商担当）

几帳面な人なのだろう。記者会見が始まるぎりぎりまで冒頭リマージュの草稿に筆を入れていた。ストイックなまでに、言葉を吟味し明快な論理展開を心がけるあたり、いかにもフランスのエリート官僚らしい。フランスの名門、国立行政学院（ENA）を卒業し、若くして同国政府と欧州委員会との要職をこなした。さる九月に同委員会委員（通商担当）に就任したばかりだが、問題に精通しているのは、経済政策運営の経験

このほかコソボ問題、EUの東方拡大、ユーロ導入と、われわれの関心事は山ほどあったが、時間の関係で質問がもつぱら日独関係に終始したのは残念である。慣例により会見での質問のチャンスは日独交互に与えられたが、これは悪平等というべきではないか。日本側記者はもつと優遇されてもよいと思う。

個人D会員（NHKOB）

加藤 雅彦

11・2（火）記者会見 司会 杉田亮毅理事長 通訳 蔵原順子 植田浩一 出席 24人

の豊富さと、理解能力の高さのせいかもしれない。

世界貿易機関（WTO）の次期貿易交渉を前にした訪日。日欧の協調体制の構築が狙いのようであった。特に米国に対して日欧が共同して対処すべき分野は多いと考えているようだ。会見でも、「日欧の共通の基盤」をしきりに強調した。「双方は、市場経済は求めても、市場社会を求めるべきではないという点で共通している。市場が価値観まで決めるべきで

ク ラ ブ ゲ ス ト



11・5(金)記者会見 司会 小池洋次委員 通訳 矢野智恵子 出席 70人

はないのだ」。そんな発言に、米国主導の市場主義への対抗意識がうかがえた。

日本滞在中はまさにフル稼働。記者会見は、成田空港に向かう直前で、司会役の筆者も時間が気になった。

次の目的地はニューヨークというので、てっきり今度は米国政府との協議かと思っただが、なんとマラソンに参加するためという。この日も、早朝に5キロほど走ったそうである。これまでのマラソンの記録は「最高が三時間二十分、悪くても三時間四十五分」。欧州にも、いよいよ「タフ・ネゴシエーター(手強い交渉相手)」が登場といったところか。

日本経済新聞国際部長

小池 洋次

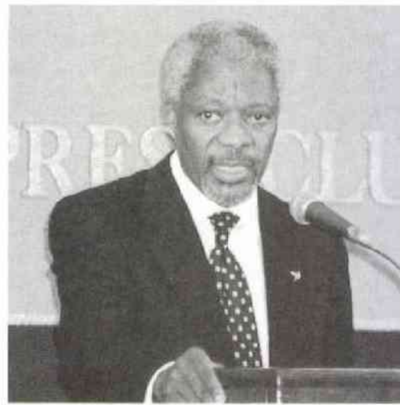
コフィー・アナン 国連事務総長

コフィー・アナン事務総長は今回で三回目の来日。ガーナ出身で、国連職員から選出された最初の事務総長として知られるアナン氏は小柄な身体を水玉のネクタイとダークスーツに包んでさっそうと現れた。

「非常に有意義な数日間を東京で過ごしました」で始まるスピーチは、天皇、皇后両陛下に、ご在位十周年のお祝いを述べ、また、小淵総理ら日本の指導者層とさまざまな問題について討議したこと、さらに国連の東ティモールにおける活動について日本政府の支持と、「非常にご寛大に一億ドルを供出していただいた」ことにもふれながら、わずか五分で終了。テキパキと質疑応答に移り、前置きの長い質問には「早く」と先を促すなど手際よきは、世界の外交官を相手に一步も引かない自信の一端をのぞかせた感じだ。

——日本の憲法では自衛以外の武力の行使は禁止されている。日本の法律を変えた方がいいと思うか。

「憲法問題をどうするか、はもちろんだ日本、日本の国民がお決めに



なること。だが、私は日本がPKOに参加することを歓迎いたします」

——もともと日本の人が国連の職員として働くべきだと思いませんか？

「私もあなたと同じ意見です。近い

アブドゥルラフマン・ワヒド

インドネシアの大統領が来日し、内外の記者たちと会見する——数年間なら、実現する可能性はゼロに近かっただろう。

昨年まで、三十年以上も権力を独り占めしたスハルト元大統領はジャナリストを嫌っていた。ジャカルタに一九九四年から三年間駐在した経験では、大統領が共同記者会見し

インドネシア大統領

たのは一度。アジア太平洋経済協力会議(APEC)の後、「ボゴール宣言」を自賛した時だけである。「新聞記者なぞ」と言わんばかりの印象を持った。

対照的に、第四代大統領に選ばれたばかりのアブドゥルラフマン・ワヒド氏は記者と話すのが好きである。ジャカルタ南郊の自宅で、ある

11・12(金)記者会見 司会 木戸湊副理事長 通訳 長井鞠子 池田薫 出席 122人

森 博

うちに国連の人事部長が日本に来て面接することになっていきますので、この人ならと思う人がいれば、ぜひ紹介していただきたいと思えます」

——(中国の記者)法輪功について事務総長のご自身のお考えは？

「私はあのような運動に対して、あのような反応をした中国政府の反応にちよっと困惑しております」といった具合。その後、ナーネ夫人とさっさと京都へと出発されたそう。

産経新聞編集委員

ク ラ ブ ゲ ス ト



いは自身が率いるイスラム教団体の事務所に、我々をたびたび迎えてくれた。

気さくさは、政治指導者になっても変わらない。影のように大統領に従う軍人たちはスハルト時代の名残だが、「インドネシア共和国大統領」について回った近づき難さは、急速に薄まりつつある。

ワヒド大統領の日本滞在は、わずか二十五時間。小渕首相との首脳会談を終え、日本記者クラブへ駆けつける慌ただしさだ。が、リラックスした雰囲気は失わない。「私も、インドネシアの有力紙にコラムを書いてきた。皆さんの仲間です」と切り出した。

インドネシアからの分離、独立を

求める動きが強まるアチエ特別州で、七カ月以内に住民投票を実施する」と発言し、会場を驚かせた。国の分裂につながる、と国内で反対する声が多い。なのに、大統領は時期まで明言した。内外の通信社はいっせいに、東京発のアージエント（至急電）を送った。

やりとりをすべて、英語でこなし。流暢でなくとも、自分自身の言葉で語っている。日本文化への関心を尋ねられ、川端康成や三島由紀夫の文学、黒沢明の「七人の侍」や「羅生門」を楽しそうにあげてみせた。小澤征爾や内田光子のレコードも好き、という。ヨー・ヨー・マの名まで口にしたのは勇み足だったが…。

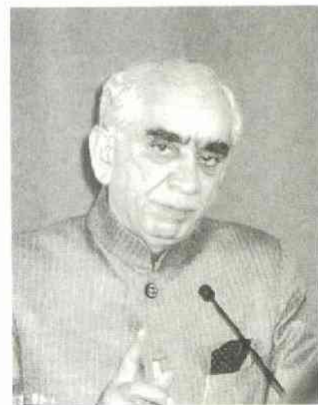
大統領就任後、情報省を廃止した。五万五千人の職員は激しく抗議したが、「必要のない役所だ」と譲らない。民主化を進めるため、プレスが自由が何よりも大切だと確信しているのだろうか。

朝日新聞外報部

福田 伸生

11・16(火) 記者会見 司会 住川治人委員 通訳 キヤサリン・スターリング 森岡幹子 出席 216人

ジャスワント・シン インド外相



で、インドがあくまでも国内の民主的手続きを踏んでいる事実と、国内にある異論や意見の対立の存在を強く印象付けようとする答えを用意していた。

ジャスワント・シン外相は、初めての訪日である。軍人出身の政治家で、インドを代表する戦略家としても知られる。最近では、米国の外交専門誌「フォーリン・アフェアーズ」に「核のアパルトヘイトに反対する」との論文を寄稿した。それだけに、難しい質問への受け答えも明快だった。

当然のことながら、会見の関心はパキスタンの問題と包括的核実験禁止条約（CTBT）署名問題に集中した。

CTBT問題では、核実験を再開しないことについては国内のコンセンサスはあるが、CTBT署名ではまだコンセンサスができていないと説明した。コンセンサスを形成できよう努力していると強調すること

も、民主政治回復への期待を語る一方で、クーデターによる政権を拒否はしない現実的対応を示した。また、パキスタンとのこれまでの対話への努力を継続する立場も明らかにした。

こうした回答で、インドがパキスタンとは比べものにならない政治の安定性と民主主義を維持していることをアピールしようとした。どんな質問にも、正面から答えようとする姿勢は見事だった。質問をはずした話をすることもなかった。

インドの安全保障と外交への深い思索に裏打ちされた自信が、質問への受け答えからは感じられた。

毎日新聞論説委員

重村 智計

11・25(木) 記者会見 司会 重村智計委員 通訳 小松達也 出席 86人

社会部文化担当始末記



平野光男

社会面に文化記事を

一九五三年（昭和二十八年）に産経新聞に入社して静岡支局を一年で本社に戻り、社会部に配属された。まず警察回りを一年ちよつとやり、その後は警視庁詰めか、本社の遊軍のどちらかへ回される。幸か不幸か遊軍になった。

「紙面が事件ものばかりではつまらん。少しは文化あふれる記事も載せよう」という部長の発案で社会部文化担当をおおせ付かった。戦前はいざ知らず、当時社会部に文化担当を置いていたのは朝日新聞だけだから、こういうかた

ちの先駆けであった。朝日新聞は文部省クラブOBが映画記者会に籍を置いていた。私も早速、映画記者会、美術記者会、放送記者会に入会した。

テレビ放送は始まって間もなくで、娯楽の中心はやはり映画だった。年間の映画館への観客動員は十億人を超えたほど（最高は五八年の十一億二千七百万人）。アメリカ映画の「暴力教室」と日活の太陽族映画の暴力と性描写が青少年育成上好ましくないとお母さん方からかみつかれ、いわゆる映倫騒動に発展した。

そのころ、日本映画六社で映画

製作者連盟（映連）

を作り、映画倫理

規程管理委員会は

その傘下にあつた。

映連事務局が

サンケイビルの中

にあつたから、ま

さに地の利。各社

首脳が集まって対

策に頭を悩ませて

いるのが、手に取るように分かった。「堀久作・日活社長が映連会長を辞任」、「映倫を改組して独立組織に」、「新映倫委員長に日本芸術院長の高橋誠一郎氏就任」などのニュースはいつも産経の独壇場だった。

最近NHKのBSで石原裕次郎主演作品が十数本上演され、久々に「錆びたナイフ」などの問題映画を見たが、目くじら立てるほどの描写もなく、今の映画のすさまじさから見れば、なぜ問題になったのか不思議な気がした。これも時代の差なのか。

高橋芸術院長の枕元で確認

映倫改組とほぼ同時期に、戦前の帝展、文展の流れを継ぐ日展が依然として文部省のバックアップを受けているのはおかしい、と美術界の刷新運動が起こり、これも民間組織に改組された。この委員長にかつぎ出されたのも高橋誠一郎氏で、確認のために目黒のアジト（自宅は確か鎌倉か葉山だった）を夜回りした。まだ九時前だったが、もう床に就かれたというので、枕元まで押しかけ確認を取った。社会部的強引さだが、高橋さんもよく会ってくださったものだ。

五七年（昭和三十二）には、第二十九回国際ペン大会が東京で開かれた。初めての国際ペンだけに川端康成会長、松岡洋子事務局長のコンビの奮闘ぶりは大変なものだった。

社会部文化担当も外信部の応援を得て、来日したスタインベック、ドス・パソスら外人作家とのインタビューを連載したりした。確か

ハンガリーにソ連が介入してハンガリー・ペンが弾圧されたので、それを巡る非難決議で理事会が紛糾したときには特ダネを書いた。

一流執筆者の「銅像との対話」

その後宮内庁記者として、美智子さま（現在の皇后陛下）と現陛下の婚約を追いかけた。昭和天皇の還暦会見で、フランス革命に興味を持っていられたことを聞き出したりもした。

東京オリンピックの後に社会部次長としてデスク業務に専念したが、六六年に教養部次長に転出、社会部文化担当は、学芸が本職になってしまった。

当時二代続いて社会部からデスクが来たし、部長も大阪からで、学芸の大記者たちはお手並み拝見と冷やかな目で見ていた。学芸面は、産経新聞と仲のいい書き手のものばかりで埋まっている感じだった。

翌年の明治一〇〇年向きの企画を討議しても何も出て来ない。こ

うなれば一流の作家、評論家を動員できる企画を立て、実行だとかかり、『明治一〇〇年銅像との対話』というプランを作り上げた。

そのとき取ったのが直接訪問方式だ。「すぐ電話に頼るけど、電話なしで直接訪問しろ」という社会部の先輩の教えである。これで高橋誠一郎さんも攻略した。三島由紀夫さんとは、既に懸念だったので声をかけると、西郷隆盛なら書いてもいいという返事。こうなれば大江健三郎さんには沖縄のひめゆりの塔を持ち出せば承諾してもらえるのではないか。成城のお宅を訪問し、大江さん攻略に成功した。

これで部員たちの協力をえて、江藤淳（ペリー提督）、司馬遼太郎（乃木希典）、松本清張（大村益次郎）、遠藤周作（大隈重信）、円地文子（岡倉天心）、なだいなだ（瓜生岩子）……という産経始まって以来の一流メンバーの執筆陣を迎えて、週一回の連載企画が始まった。

電話なし訪問の成果

電話なしの直接訪問で執筆依頼に成功したケースはまだある。一年後に支局から転動してきたK記者が企画会議で「井伏鱒二に何か書いてもらったら」と提案した。

「書くわけないだろ」と冷笑した大記者の鼻を明かそうと電話しないで井伏宅訪問を命じた。もちろん断られた。それから毎日のように訪問させた。家へ上げてくれる先生も不思議だが、厚かましく出掛けるK君もなかなかのものだ。

一カ月ほどして「ケンちに写真頼んで、人の話書こうか」と言われたのである。ケンちとは、写真にこつていた評論家の中島健蔵氏である。こうして井伏鱒二文、中島健蔵写真という異色豪華連載『風貌姿勢』が始まったのである。もうひとつ電話なし訪問の話を書くと、私が夕刊フジの学芸部長をしていたとき、純文学を中心に流行作家に毎日（百回）エッセイを書いてもらって看板連載にした

ときのこと。それを吉行淳之介さんに頼んだときこの戦法を取った。

『贗食物誌』（連載時には『すすめすめ勝手に進め』の「後書き」で氏自身が「エッセイの連載は、甚だ辛い。そういう仕事を引き受ける気はなかったのだが、学芸部長の平野光男さんがなんの予告もなく月光仮面のオジさんのように、突如あらわれては『ヤレ』という」と執筆のいきさつを書いておられる。イラスト山藤章二との組み合わせの連載エッセイはその後一回おきに登場して評判になり、「山藤さんとなら書こう」という作家も現れたりして、夕刊フジの名物コラムだったが……。ああいうスペースは、今はもうすっかり姿を消してしまっただ。

ひらの・みつお会員 一九二九年生まれ
東大卒 五三年産経新聞入社 社会部次長 教養部次長 論説委員 夕刊フジ学芸部長を歴任 再び論説委員になり 七九年退社 サイマル出版会常務取締役 西武百貨店文化事業部担当部長（美術館・コミニティー・カレッジ担当）を経て 現在 NHK学園専任講師

書いた話

書かなかった話

ワーキング プレス

テレビ報道を監視するためのモニター制度の創設など、自民党の神経質なマスコミ対応が続いている。また、こうした過剰反応ぶりは放送内容にとどまらず、放送前の管理強化にも及んでいる。

一昔前までは、議員を個別に説得すれば何とか出演交渉が成立したもののだが、最近は広報など「党の窓口を必ず通すように！」とおしかりを受けることも多々ある。ただ、その程度であれば「民間企業にも広報セクションはあることだし」と納得もするのだが、昨今の締め付けは、それほど生ぬるいものではない。

閣僚や政務次官にまで党サイドから「微妙な時期なので今週末のテレビ番組の出演は控えるように」と事前にファクスが送られる始末である。ある政務次官が「十万票もの有権者の支持を得て当選した議員にテレビ出演の判断も任せられないのか。末期的だな」と思わず愚痴をこぼすことも……。

新聞記者から「テレビは容易に議員が出演に応じてくれるから楽でいいよね」などと皮肉を言われ

—TV政治番組—

政党の過剰反応と 視聴率

和田 圭
(フジテレビジョン)

ることもあるが、現実はなかなか厳しいのだ。いざ出演となった後のキャンセルも当たり前。理由は「執行部から止められた」「相手がアイツじゃダメ」「風邪をひいた(?)」等々。ドタキャンの場合は本番直前まで胃の痛みを抑えながらの出演交渉が続く。

以上はフジテレビの「報道2001」放送前のひとコマである。

この「報道2001」や「日曜討論」(NHK)「サンデープロジェクト」(テレビ朝日)などのレギ

ユラー番組のほか、国政選挙や党首選をめぐるテレビの政治報道の功罪が、ここ数年、新聞各紙や雑誌などで頻繁に取り上げられるようになった。橋本首相辞任に伴う前々回の自民党総裁選も、テレビ報道の過熱ぶりが話題となった。直前に行われた参院選で、自民党が予想以上の大敗を喫したことで小淵、梶山、小泉という一応の役者がそろったことで、テレビ各社の取り組みが活発化したためである。

旧聞に属する昨年の総裁選をここであえて持ち出したのは、「テレビは視聴率が取れるから」お祭り騒ぎで総裁選を扱う」という当時の一部新聞の批判記事に違和感を覚えていたからである。政治不信に起因するであろう視聴者、有権者の「永田町政治」に対する拒否反応は、もつと根が深いのである。総裁候補を並べてみたところで高視聴率などは期待できない。多少乱暴な比較になるが、総裁選は視聴率だけを見れば、ドラマやアニメの「再放送」を裏番組としてぶつけられても勝利が危うくな

る程度の代物なのだ。

先日、鳴り物入りで試行された党首同士のクエスチョンタイム。NHKが「淡々と」生中継したが視聴率は一回目、二回目とも一・七%（ちなみに同時時間帯の高視聴率番組は通常一〇%前後、夜のゴールデンタイムでの高視聴率番組は二〇%以上）。「視聴率万能主義」の立場に立たずとも、政治報道に携わる身としては考えさせられる数字である。

テレビの政治報道に政党が過剰反応を示す一方で、「お祭り騒ぎ」で放送しようが「淡々と」中継しようが多くの視聴者から背を向けられた「永田町政治」をどう受け止め、どう伝えたいのか。国会改革に人一倍の熱の入れようだった自由党の小沢党首は「クエスチョンタイムは民放が。面白く。放送してくれなきゃダメだよ！」と不満顔なのだが……。

わだけい 一九七五年入社 首相官邸 平河 野党各クラブキャップ 政治部デスクなどを経て 「ニュースJAPAN」編集長 「報道2001」ゼネラルプロデューサーを務める 現在 解説委員

外資系ブランドによる「化粧品のパート」が、「日本進出」に力を入れている。十一月二十八日、第一号店を東京・銀座に開店したのが、フランスの「セフォラ」。高級ブランド「フェンディ」やパリのしにセ宝飾店「ショーメ」を傘下に置く、モエ・ヘネシー・ルイ・ヴィトン（LVMH）のグループ会社だ。欧米八カ国に百七十店以上を展開中で、日本にはこれから五年間に四十一五十店を計画している。

千平方メートル超の空間を持つ店内に入ると、一階に香水、二階にメイクアップ、三階にスキンケアと、フロア別に商品が並ぶ。黒、白、赤の三色を基調とするインテリアが特徴だ。

来店客が自由に商品を試し、必要な場合、店員に話を聞き、購入する姿も目を引く。お客の自主性に任せたこの売り方、化粧品の対面販売になじんだ日本から見ると「黒船来襲」にも似た衝撃を与えられるらしい。

先駆けて登場したのが、イギリスの「ブーツ」だ。原宿店、吉祥

寺店に続いて、十月に銀座店もオープン。複数の商品を組み合わせ、て手ごろな価格で売るセット販売が人気を呼び、国内三百店の出店を目標に掲げている。

こうした化粧品業界のニュースは、東京・大手町の経団連にある「重工業記者クラブ」から発信されていく。重厚長大を連想させる鉄鋼や化学業界がメインの担当だが、「化粧品」「化学品」と位置付けられている。

「華やかでいいな」。同僚からせ

—セフォラ開店—

外資系ブランド 取材の舞台裏

▶ 関根秀行
(産経新聞社)

ん望のまなざしで見られるものの、外資系ブランドへのアプローチは、そう単純でもない。

最高責任者が本国にいたため、経営戦略を聞く場合は、日本法人の社長や役員に申し込む。大体、「いつ、どの紙面で載りますか」と逆質問を受け、取材企画書の提出を要求される。トップが時間を割く以上、「望ましい掲載」が前提にあるようだ。

あるブランドの実務担当者には、「日本での事業の現状と展望を聞かせてほしい」と依頼し、三十分の時間を得るのに三週間近く待たされたことがあった。「スタッフの数が少ないので」と説明されたが、一時が万事、手間を惜しんでは前に進まない。

化粧品の場合、商品の特性もあって、マスコミ対応の主役は女性だ。英語や仏語に堪能なうえ、プロフィールを聞くと優秀な方々が多い。ただ、その仕事ぶりは広報というよりも宣伝に軸足が置かれる。商品に関する知識の豊富さで信頼できるものの、目先の異なる話題に転じると口をつぐんでしま

い、困ることもある。

LVMHグループの日本人で働く女性に「セフォラの評判、どうですか?」と何気なく聞いたところ、「立場上、コメントできません」とまじめに拒否されたのには、面食らった。

日本の化粧品業界にもライバルメーカーの話題など「余計なこと」は口外しない。面がなくてはならない。それでも、非公式な情報交換は成立するし、信頼関係があれば融通も利く。外資系ブランドの場合、やや取りつく島もないような印象が感じられ、「関係者の話」を得るのに工夫が欠かせない。

女性雑誌の編集部にいる友人によると、外資系ブランドには、マスコミ対応の失敗で「ブランドに傷がつく」ことへの心配が強いという。宣伝臭に偏らない取材をどう進めるか。試行錯誤を重ねていきたい。

せきね・ひでゆき 一九八七年産経新聞入社
通産省 日銀担当などを経て 一九九九年五月から重工業記者クラブ担当

ワーキング
プレス

今日四日午前六時二十一分、くす玉が割れ、新庄囃子と拍手が鳴り響く中、シルバーマタリックに鮮やかなグリーンラインの入った山形新幹線「つばさ116号」が山形県新庄駅から東京へ旅立った。高速交通網の整備が遅れていた山形県北部の最上地域と首都圏が直結。東京―新庄市間が最速で三時間五分となり、従来より三十八分短縮された。当日、本紙の記者が東京駅からの一番列車に同乗、社内の様子を伝えた。

沿線市町村は観光振興や新たな地域開発を促進する「延伸効果」に期待を寄せる。同時に自治体の財政負担、先が読めない利用率、山形空港・山形―東京便の存廃問題などの課題も抱えている。

山形新幹線は平成四年七月に運転を開始、県都・山形市や南部の置賜地域と首都圏をつなぐ動脈になっている。そしてこの日、「つばさ」は山形市から新庄市まで六一・五キロ北へ伸びた。「新庄延伸」は平成九年二月に決定し、人口五万人にも満たない新庄市まで新幹線を走らせる夢が実現した。

県の担当者は「今世紀中に新庄延伸が実現するとは思わなかった」と言う。高橋和雄知事とJR東日本の松田昌士社長のトップ会談で最終的に合意したといわれる。それ以来、「どうやってJRを説き伏せたのか」と、県庁には全国の自治体から今でも問い合わせ

列島報告

— 山形 —

新幹線新庄延伸 — 期待と残された課題と —

滝井 充 明

(山形新聞社 報道部)

ークに組み込まれた。これを契機に地元は、全国からの誘客に躍起となっている。

熱意の表れすぎのためこんな出来事も起きた。県や沿線の市町村などは利用促進を図るため割引制度を導入したが、これを活用する

と東京―新庄の往復料金がたったの二十円になってしまった。期間、対象者とも限定だが、地元のマスコミは、この話題を大きく取り上げた。

周辺は温泉が豊富で、最上川を中心とした自然、新鮮な果樹と観光資源の宝庫だけに、最上地区は、延伸効果に熱い期待

を寄せる。しかし、全国的には知名度不足は否めず、情報発信の方法や観光客の受け皿づくりは万全とはいえない。不況の影響で観光客の伸びが落ち込む中、新庄延伸がどの程度、誘客アップにつながるのか未知数な部分も多い。

また、廃止の危機に立たされて

いる山形空港の山形―東京便問題も深刻になりつつある。新庄延伸と競合し、利用率の低下によって廃止に追い込まれかねない情勢。県民からは「新幹線も飛行機もねだる」県の姿勢を疑問視する声もある。

延伸事業や駅舎の新築・改築、駅前再開発などに要した地元自治体の財政負担、新庄―山形間の利用率などの不安も抱える。JR仙台支社は延伸効果によって二〇％以上の乗客増を見込んでいるが、それでも赤字になるのは三十年ぐらい先と見込んでいる。ある県の担当者は「新幹線を生かすも殺すも、あとは地元の努力次第。これからは沿線市町村の力量が問われる」と言い切る。

新幹線を基盤に沿線自治体が課題を克服しながら、アイデアを出し、どのように地域の発展につなげていくか、正念場はこれから。地元紙の視点から時には厳しく、時には温かく見守っていききたい。

(たきい・みつあき)

ことばの散歩

14

解散・総選挙のカウントダウンが進む。選挙ムードが本格化すれば、当然、情勢記事が紙面を連日飾ることになるが、過去の紙面を見る限り、

気になる表現や言い回しが少なくない。

例えば「二世議員」。政財界からスポーツ界まで、二世ばやりのご時世。首相になるにも二世が条件なのかと錯覚しそうだ。

ただ二世といっても、実は祖父の支持基盤を継いだり、入り婿、四代に及ぶ家系などのケースもある。問題なのは、血縁を軸に事実上の世襲状態が生まれ、そこに閥が形成されて利権が継承されていることだ。場合によっては「世襲議員」との使い分けが必要ではないだろうか。

議席の過半数確保で「統投」を表明したり「途中降

選挙用語

磯貝 誠

「ことばの選挙」である校閲部の役割も大きい。朝日新聞校閲部

板」したり。選挙や公職の座を野球などスポーツに例える表現も定着している。分かりやすい比喩を、という気持ちは分かるが、国民は観客席にいるのではない。一人ひとりが、そこに参加して政治意思を形成する主体のはずだ。その意味で、有権者意識をやや軽視した表現といえないか。

女性を特別視した「マドンナ候補」という表現は下火になったが、女性軽視と取れる「ウグイス嬢」は健在だ。マイクを握る女性運動員の意味を、美声と口先だけに見出しているかのようだ。そういえば、女性運動員がらみで係争中のセクハラ疑惑もあった。

政治の世界では保守と革新の境界がボーダーレス化して久しいが、新聞の選挙用語に限っては、常套句という保守勢力が安定多数を占めている。保守逆転の時代は来るのか。

試写会

「大西洋の上で生まれ、一度も船を下りたことのないピアニストの伝説」という、うたい文句の印象とは少しずれていたが、ピアニストが船から下りないわけを、じっくり語りかける、セピア色の写真のような、重厚で味わい深い映画だった。

船という限られた場所が舞台の映画なのに、しっかりとした台詞が広い世界を作り上げ

ている。原作を読んだが、ピアニストの相棒だったトランベッターの一人語りの舞台劇だった。確かな骨組みの支えになっている。

舞台は大西洋を往復する大型客船「ヴァージニア号」。ピアニストの名前はナインティーン・ハンドレッツ



ドといい、船に置き去りにされていたのを、黒人の船員に育てられる。名前の由来は、生まれた年の一九〇〇年にある。即興のピアノ演奏が、多くの乗船客を魅了して、船上のピアニストが一生の仕事になった。

ピアニストに一度、船を降りようかなと考えさせたのは、あどけない表情の少女。少女は「いつか尋ねて来てね」と住所を告げて下船するが、結局は廃船になるまで船を離れられない。ピアノのキーは八十八。無限ではないが、音楽は無限。船というわずかの広がりの中で無限の音楽を表現できる。陸地は広すぎる。ピアニストが船を下りられない理由なのだ。

人間の生きる空間とは何なのか。ピアニストは船から哲学的な問いを投げかける。

東京新聞論説委員 垂水健一



おそろいの帽子をかぶって
祝福を受ける高垣会員

第七四回ゴルフ会が、快晴に恵まれた十一月九日、程ヶ谷カントリー倶楽部で開催されました。今回は、高垣金三郎会員（朝日新聞OB）の米寿の祝いとクラブ創立三十周年を兼ねた記念コンペとあって、最近では最も多い七組二十五人が集まりました。なかでも高垣会員と佐治俊彦会員（毎日新聞OB）が夫人を伴っての「おしどり」参加。ほかほか陽気の中、真っ白に映える富士山を

30周年記念ゴルフ会 高垣会員の米寿を祝う

仰ぎ見ながら快適なゴルフを堪能しました。

パーティーでは、記念コンペに合わせて特注したNKCのマーク入りの帽子を全員に配布し、それをかぶってのゴルフ談議。主賓の最高齢者、高垣会員が見事にニヤピン賞を獲得して全員「脱帽」です。

その高垣会員、三十周年で八十歳以上の会員に贈られた水玉のネクタイを締めてパーティー会場に現れ、ゴルフ会幹事長の吉岡秀夫会員から米寿祝いの万年筆を受け取ると、「ネクタイが祝い品だと思っていました」と、ダブル祝いに大喜び。勢い余ってか、あいさつでは「年の功」をじゅんじゅんと説いたうえで、「一年に何回か、こういう会に出ています、いつもならツアーラウンドでバックティー」と、言っているの、並みいる会員諸氏をあせんとさせる怪気炎ぶりでした。

コンペの結果は、ネット70で回った島袋龍三会員（琉球新報）が初参加のために二位となり、ハンディに救われた小生（那部吉正）がタナボタ優勝、三位は中島善範会員（朝日新聞OB）でした。

■会議報告■

第328回理事会（書面）

クラブの理事・総務委員長を務めた武山泰雄会員（個人D・日経出身）から寄贈された三百万円をクラブ賞規約に従い、日本記者クラブ賞基金に繰り入れることを了承した。

第267回会員資格委員会

（11・15 小会議室）

十二月一日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 古川、上田、船田、佐藤の各委員。

第207回会報委員会

（11・17 シルバールーム）

十一月号について意見交換した後、十二、一月号の編集を協議した。

出席 住田委員長。大留、進藤、仲中澤、平野、堀江の各委員。

第282回企画委員会

（11・18 宴会場）

今後のクラブゲスト候補を協議したほか、「2000年予想アンケート」の出題割り当てを行い、次回委員会でも問題を作成することにした。

出席 堀川委員長。住川、重村、立岩、小池、柳原、森、春名、福沢、菱山、和田、鳥居、ヒールシヤ、今井、長沢の各委員。

会員の著書（ご惠贈いただきました）

微風烈風―編集局デスクから続微風烈風

（中日新聞本社 各一、六〇〇円）

アラビアのロレンスを求めて

（中公新書 七八〇円）

牟田口義郎会員

寄贈書

日本新聞年鑑一九九九―二〇〇〇年版

日本新聞協会

中国人特派員が書いた日本

（日本僑報社 二、八〇〇円）

徐啓新会員

（講談社 一、六〇〇円）

小山内美江子さん

招待券

朝日新聞社から「ランゲン夫妻の眼展」「上村

松園展」「色心不二 藪内佐斗司の世界展」「ねこのダヤン 池田あきこ原画展」「アーヴィング・ペン全仕事展」「安野光雅展」、読売新聞社から「アレンセル・アダムスの世界展」「傳抱石展」、片岡護会員から「新芸術展」の招待券をご惠贈いただきました。お礼申しあげます。

◇個人D会員

プロフィール

十一月一日付入会の個人D会員、法人賛助会員、特別賛助会員の方々です。順不同。

「二〇〇〇年度日本記者クラブ賞」

候補者の推薦を

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、明年一月三十一日（月）までに候補としてご推薦ください。会員およびプレス会員社に属する方々が候補有資格者です。

「選考基準」は左記の通りです。

- ① 現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である。（現役という意味は現に活動しているということ）故人は対象としない）
- ② 活動が長期にわたるという意味で

の「敬老賞」でもなく、日の当たらない困難なところで活動しているという意味での「風雪賞」でもない。

- ③ スクーブ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。

- ④ その存在および業績が、ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。

推薦者は所定の用紙に記入し、推薦理由、参考資料を添えて提出願います。詳細につきましては、事務局へお問い合わせください。

● 囲碁の会 ○

十一月二十日（土）の例会には二十人が参加、総対局数は四十二局でした。

好成績を上げたのは、久々に参加して四連勝の滝川勇会員のほか、高井明昌（四勝〇敗）、石川基（三勝〇敗）、後藤光祥（四勝一敗）、小野盛四郎（四勝一敗）の方々でした。

いよいよ次回は年末恒例の大軒杯争奪戦です。日時は十二月十八日（土）午前十一時から。会長賞のほか豪華商品をたくさん（？）用意しています。多数の参加をお待ちします。

会員割引の

クリスマスディナーをどうぞ

十二月二十四日（金）、二十五日（土）、十階アラスカのクリスマスディナー券（八五〇〇円、一二〇〇〇円）が、会員の申し込みの場合には同伴客も含め二割引になります。ご希望の方は、三五〇二―二七三一で、氏名、会員番号をおっしゃってご予約ください。

◆ 将棋同好会 ◇

将棋同好会の納会を十二月二十五日（土）午後一時から、宴会場で行います。将棋連盟の協力を得て、七月の「発会式」で指導していただいた大野八一雄六段、安食総子女流二級を再度お招きします。前回、涙をのんだ方、初挑戦に燃える方ともども大歓迎ですので、奮ってご参加ください。参加費は千円です。

「駒落ち」の定跡通りに指せば、プロもついつい手が甘くなることがあるそうです。桐山清澄九段著『駒落ちテクニク』（創元社）が、そのための参考になるとの情報も……。



写真部

写真 平川 高行

(一九八四年共同通信入社
現在 大阪支社写真部)

幻想的な光を放つクリスタル製のクリスマスツリー

2000年への輝き

あと二十日で、いよいよ二〇〇〇年。一九〇〇年代最後の忘年会などと年甲斐もなくはしゃぎまわれば、足元が危うくなることくらいは自覚している。

二〇〇〇年といっても、空や環境がにわかにはバラ色になるわけなし。コンピュータ誤作動で、年金口座に「お年玉」……なんて僥倖も期待できるまい。

さて999年——つまりいまからちょうど一〇〇〇年前って、どんな世の中、どんな年末だったろう。藤原道長の長女・彰子の入内決定。彰子まだ十二歳。一条天皇は中宮の胸のふくらみを待つ。プリンス誕生まで九年かかったそう。道長の喜びもさぞかし……。だがキリストも西暦も知らない道長が「オレの世紀だ！」などと思っわけはない。

こんどは四〇〇年前、一五九九年は、どんなトシ？ 翌年が関ヶ原だから大名夫人のみなさんも「お内乱・お戦争」で大変だったろう。そのうえに世継ぎ懐妊までせきたてられて……。

地球のあちこちの、イロイロをあわせ考えると、日本の世紀末も、そこそこ幸せなんだ。写真は大坂港海岸通りのXマス電飾。クロスフィリターを使っているので、電飾が十文字に光ってみえる。会報をカラー刷りに変えたいほど美しい。来年の夢は会報のカラー刷りでいかが？

(中川 朗)

「会員の声」欄へ投稿を——会報委員会から

「新聞には投書欄や読者とのQ&Aのページがある。会報にも、そうしたコーナーがあってもいいのではないか」——会報委員会でのこのような意見が出され、一月号から「会員の声」欄を設けることになりました。会報の編集や記者会見の運営・ゲスト選考に対するご意見をはじめ、レストラン・ラウンジのサービスなどについてのご要望でも構いません。事務局の会報係まで二百字程度でお寄せください。記名で掲載させていただきます。

スペースの関係で、休載やすべてを掲載できません。

『メディア資本主義』

高橋文利 (朝日新聞OB)

二十一世紀は情報の時代であるとか、情報を制する者が世界を制するとか言われています。このこと自体、情報技術の発達が資本主義そのものの変貌を迫っていると言えるでしょう。こうした状況を表すのに「サイバー資本主義」とか「電脳資本主義」、あるいは「インターネット資本主義」または単に「ネット資本主義」「新資本主義」などが使われています。が、私は「メディア資本主義」が最も適当であると考え、その解説を試みた次第です。

(講談社現代新書 六四〇円)



『北京特派員』

信太謙三 (時事通信解説委員)

通信社記者は緑の下の力持ち——。苦勞も多いが、やりがいもある。新聞社、テレビ・ラジオ局デスクとの見えざる「信頼関係」を頼りに記事を出す。そこでは純粋に記事の価値だけが問われ、彼らの判断は驚くほど正確だ。新聞話者になってしまった今、合計八年にわたった

北京での取材活動を通して、それを書き残しておこうと思った。天安門事件、鄧小平死去の取材合戦があった。尾行も経験した。が、北京特派員時代が懐かしい。

(平凡社新書 六八〇円)

いこともあるかと思いますが、できるだけお答えする予定です。掲載できなかった場合も、関係の委員会や担当者に報告いたします。会報委員会は、会員の声をより一層反映した、親しまれる会報づくりを目指します。

年末は二十八日まで

新年は五日からオープンします

クラブは十二月二十八日(火)午後三時で閉室します。レストランは同日の昼まで営業いたします。新年は五日(水)午前十時から平常どおりオープンします。事務局も二十九日から一月四日まで休ませていただきます。

新しい会員名簿をご確認ください。十一月現在で作成した会員名簿をお届けしました。誤植、変更などがありましたら、事務局へお知らせください。

計報 関憲三郎会員(読売OB、71歳)が十一月二十五日肺がんのため、大日向一郎会員(日経OB、74歳)が十二月一日肝硬変のため死去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

会員現況 法人会員 一五三社 基本会員 八三一人 個人会員 一、八〇八人 法人・個人賛助会員 七二社 二〇四人 特別賛助会員 五七人名誉・功勞会員 一四人

計 二二五社 二、九一四人

十二月の行事(6日現在)

- 14日(火) 午後3時15分～4時20分 レビ・イスラエル副首相・外相記者会見
- 17日(金) 午後2時35分～3時30分 ジョスパン仏首相記者会見
- 20日(月) 正午～午後2時 石原慎太郎東京都知事昼食会

会報委員会

- 委員長 住田良能
- 委員 大留明夫 進藤 卓 仲 晃
- 中澤孝之 平野恭子 堀江瑠璃子
- 連絡 長谷川和子 本庄五月
- (電話) 〇三―三五〇三―二七二二
- (FAX) 〇三―三五〇三―二七二二